TSURU

FIELD MUSEUM NEWS

特集

地域交流研究センター4部門の活動紹介
じつは長い歴史のあるつるフィールド・ミュージアム

vol.12

2026 Aug



ニホンリス／本学裏山／2024年9月5日撮影／北垣憲仁（地域交流研究センター教授）＝写真

じつは長い歴史のあるつるフィールド・ミュージアム

――つるフィールド・ミュージアム40年の原点、大田堯（たかし）先生と今泉吉晴先生の資料を収蔵しています――

都留文科大学では、1983年、大田堯元学長（1918-2018）が提唱した「都留自然博物館」構想を起点に、「フィールド・ミュージアム」という実践と思想を大切にしてきました。これは、地域全体を博物館に見立て、現地に赴きじかに学ぶ姿勢を大切にしようとするものです。この構想は当時、全国の大学の先駆けとなるものでした。

また同時期に今泉吉晴先生（本学名誉教授）によって「都留フィールド・ミュージアム」構想も提唱されました。生きものを捕えてきて研究するのではなく、現場に赴き、じかに見ることで、生きいきとした本物の姿を見ることができると考え、ムササビ、リス、ネズミ、モグラをはじめとする、都留でみられる身近な生きものの観察を学生たちと続けてきました。

自然と人との距離が近いという立地を生かした地域の実践は多岐にわたり、多くの学生、教職員、市民によってこの構想が継承されてきました。こうした地域での諸実践や思想を大切に受け継ぎ発展させていく目的で2003年4月、本学「地域交流研究センター」が発足しました。

そして2025年に本学の新しい学びの空間として「つるフィールド・ミュージアム」が完成しました。「楽しむ、学ぶ、つながる」をテーマに、地域や暮らしに根ざした新しい知のあり方を探究する場をめざしています。大田元学長は、「都留自然博物館」を「人間と自然との共存の関係を含んだひとつの新しい生きた社会の創造である」（※）と記しています。いのちある人間と人間、人間と自然がかかわり合い支え合う世界に向けて、新校舎がまさにその「拠点」となることをめざしています。

今年度、新校舎の資料室には、大田元学長と今泉先生の貴重な資料が配架されます。誰もが活用できるよう、資料の研究やデジタル・アーカイブに取り組んでいきます。

※『大田堯自撰集成 補巻 地域の中で教育を問う（新版）』



新校舎の資料室



左が今泉吉晴先生、右が大田堯元学長



1980年代、石船神社でのムササビ観察会のようす

「つるフィールド・ミュージアム」構想の原点を大切に活動する学生団体が誕生しました

ロハ台倶楽部

「ロハ台倶楽部」は2025年10月から活動を始め、現在60人以上の学生が参加しています。「ロハ」とは、公園などの無料のベンチのことで、大田元学長の、青年との交流の実践『ロハ台』の実践にちなみ名づけました。テーマは「一人ひとりが学芸員」。博物館の役割の基本、モノの「収集・保存」「調査・研究」「展示」といった仕事は、大学で学ぶべきことが凝縮されています。

学生は「学生学芸員」として、それぞれの関心にそくしてチームをつくり活動しています。ビオトープの手入れをしたり、周辺の自然や文化の調査をしたり、地域の人びとへの聞き書きを行ったり。こうして発見したことを、展示や誌面を通じて、多くの人と共有してきました。今後は学生によるミニギャラリートークや冊子編集を通して図録の作成などにも挑戦していく予定です。







都留文科大学 地域交流研究センターとは

地域交流研究センターは、都留文科大学と地域をつなぐさまざまな活動と研究に取り組むための拠点です。地域は、人びとが生まれ育ち、自然とかかわりながら暮らし、文化と歴史を刻みつづけている現場です。そこには、自然・人間・社会のあり方を問いなおす手がかりがあります。人間探求を掲げる本学らしいこうした取組を大切に受け継ぎ発展させていくことを目的として、2003年に地域交流研究センターが発足しました。現在4つの部門に分かれ、学生や教員、市民など、世代や立場を超えた人びとが活動に携わっています。

「つるフィールド・ミュージアム」とは

都留文科大学では、地域そのものを博物館（ミュージアム）に見立て、身近な自然や文化に親しみ、じかに触れ、学びあう「つるフィールド・ミュージアム」構想を推進してきました。2025年に新設された新棟「つるフィールド・ミュージアム」は、地域（フィールド）の自然や人びととの出会いを楽しみ、生きものや人との交流を通して学びを深め、新たな人間関係を創造する拠点です。「まちの縁側」としての機能をもつテラスや、生きものとの交流ができるビオトープ空間、子どもたちも楽しめるライブラリなど、学びを支える環境を整えています。

都留文科大学 地域交流研究センター
つるフィールド・ミュージアム
TSURU FIELD MUSEUM

〒402-0054 山梨県都留市田原3丁目8−1
[開館日] 月～土曜日（午前9時～午後5時）
[休館日] 日・祝・年末年始・その他大学の定める日 ※詳細は大学WEB
[Tel] 0554-43-434 [E-mail] ckouryu@tsuru.ac.jp



佐藤みのり／
FIELD MUSEUM NEWS 第12号
発行：© 都留文科大学地域交流研究センター 発行日：2026年8月20日
[センター担当教員] 内山美恵子／北垣憲仁／北嶋信／佐藤比呂二／佐藤みのり／佐野夢加／鈴木健大／平和香子／堤英俊／冨永貴公／鳥原正敏／野中潤／畠山勝太／原田真喜子／日向良和／福島万紀／別宮有紀子／山越英嗣／山本剛／山森美穂／吉岡卓／吉田恵理／
[協力研究員] 菊池香帆／北浦貴之 [事務局] 古屋道輝／天野利人／渡部美由紀

都留文科大学 WEB　地域交流研究センターX

都留文科大学 地域交流研究センター
つるフィールド・ミュージアム
TSURU FIELD MUSEUM

都留文科大学 地域交流研究センター　Research Center for Community Collaborations

地域交流研究センター4部門の活動紹介

共生教育研究部門

少子高齢化・過疎化する地域の状況や課題と向き合いながら、共生のまちづくりに向けて、教育活動を通してアプローチしています。情報分野での学びを通して、地域と大学とのつながりを深めることをめざす「地域情報教育分野」。図工・美術という造形活動から地域教育のもつ可能性を深める「地域美術教育分野」。地域の特別なニーズのある人たちの教育・心理的支援や総合的な地域づくりの推進をめざす「地域インクルーシブ教育分野」。地域の人たちとともに学びの場を創り出しながら学問知をつなぐことをテーマとした「社会教育分野」の４分野で展開しています。

地域美術教育分野



近年、学校現場では設備管理の課題から、粘土を焼成する体験が難しくなっていることから、都留文科大学附属小学校５年生を対象に、図画工作科「やきものづくり」の授業を担当しています。単なる体験学習や技術指導ではなく、「土を捏ね焼く」という人の根源的な営みに着目し、その教育的意義について探究する研究活動です。授業では、子どもたちが手を使い、自ら考え判断しながら製作に向かう姿を重視し、私たちはその学びにどのように寄り添うことができるのかを課題としています。昨年度は、学習環境の変化が学びに与える影響に注目し、子どもたちを大学へ招いて活動を実施しました。

地域情報教育分野



都留市教育委員会と連携し、地域の小学生を対象に「子ども公開講座　VR＆レーザーカッター体験講座」を開催しました！今回の目玉は最新デジタルの体験。子どもたちは VR ゴーグルを覗き込み、まるで本当に海の中を泳いだり空を飛んだりしているような大迫力の没入感に目を輝かせていました。さらに、レーザーカッターを使った「デジタルものづくり」にも挑戦。アクリル板の廃材を再利用したネームプレートや、みんなの作品を組み合わせて作ったクリスマスリースなど、エコでクリエイティブな作品が誕生！定員満員の、大盛り上がりの１日となりました。

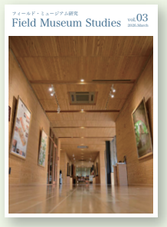
地域インクルーシブ教育分野



多様な人々が境界を超えて交流することをコンセプトに掲げる「都留文科大学クロスボーダー・プロジェクト（クロボ）」。2024 年度の文部科学大臣表彰を経て、2025 年度からは待望の留学生の参加が始まりました。従来の障害／健常や世代の枠組みに加え、新たに人種や国籍、言語の壁をも超える多様な交流が生まれています。身ぶり手ぶりを交えながら互いを知り、共に活動を楽しむ中で、クロボの魅力は一層の広がりと深まりを見せています。進化を続けるクロボに、今後もぜひご注目、そしてご参加ください。



社会教育分野



フィールド・ミュージアム・スタディーズ学生編集部では、山梨県内の地域を舞台にした魅力的な学びの実践を、学生自身が実際に訪ねて取材しています。先輩教員がどのような出会いや迷い、試行錯誤を重ねながら授業づくりをしてきたのかを知るとともに、地域学習を支えている人々や場、活動に目を向けながら、「自分はこれから、学びや教育にどのように関わっていきたいのか」を考えています。2025 年度は、上野原市秋山地区をフィールドに取材を進め、『フィールド・ミュージアム・スタディーズ』Vol. 3 を発行しました。

自然共生研究部門



部門の概要

キャンパス内では動物園や博物館ではみられない生きいきとした動物や植物にいつでも出会うことができます。ていねいに観察し、ものごとからじかに学ぶことで、自然との関わりや、暮らし、文化のありようについて探究していきます。

近年の活動

自然共生研究部門では、ビオトープの整備をはじめ、キャンパス内の生物多様性調査、絶滅危惧植物の保全活動、都留市内の湧水に関する研究、小学校での理科実験教室など、多彩な活動を展開しています。学生たちは、キャンパスや地域そのものを学びのフィールドとして、身近な自然と向き合い、生きものたちの多様性や美しさを発見しながら学びを深めています。時には科学実験に胸を躍らせ、時にはフィールドワークを通して新たな発見に出会いながら、学生たちは自然を科学的に捉える力と豊かな感性、そして実践的な力を育んでいます。

まちづくり研究部門



部門の概要

地域活性化及び持続可能なまちづくりを目指し、地域住民や自治体、地元企業等と連携しながら実践を通して研究します。まちづくりのプロジェクトを通じて、学生と地域が共にこれからの地域社会のあり方を考察する機会を創出することを目的とします。

近年の活動

まちづくり研究部門では、2024 年度から JR 東日本と連携して山梨県東部地域における観光ツアーの造成に取り組んでいます。学生たちが地域の魅力を発見し、ツアーを企画、JR 東日本にプレゼンして採用案をツアーとして販売し、ツアー当日のアテンドを行います。2025 年度は、大月市における本陣跡の古民家を舞台に、織機を運び込んで郡内織の織物体験をしたり、笹子追分人形や着物着付け体験をしたりするツアー「郡内織物語～大月の織物づくり＆着物体験の旅～」を実施しました。県外や留学生の参加もあり、甲州街道には一日歓声が響きました。

グローカル交流研究部門



部門の概要

地域の自然と文化の魅力を実地に学び、留学生や多様な人びととの交流や学び合い方、地球規模の視野を育むことを通して持続可能な地域のあり方を考えます。自然観察会や地域での交流会の企画や運営に参加できます。

近年の活動

毎年好評の留学生たちと行う「ムササビ観察バスツアー」を、2025 年 12 月 6 日（土）に留学生５名と通訳を務めてくれた国際教育学科の学生、地域の方々と都留文科大学の学生たちと共に実施しました。前半は「つるフィールド・ミュージアム」にて、ムササビに関するミニ講座を実施し、後半は今宮神社へ行きムササビの観察を行いました。観察では実際に滑空する様子を見ることができ、留学生からも好評でした。振り返りでは、北欧からやってきた留学生たちが、母国で盛んに実施されているアウトドア教育とムササビ観察会の類似性を議論してくれました。

その他の活動

市民公開講座

まちに開かれた大学を目指し市民のみなさんや学生に向けた講座を定期的に開催しています。有識者を講師として招き、講演会、観察会、ワークショップなどを実施しています。

R7 年度の活動

- 春　いきものかんさつはおもしろい！ 介護予防教室 転ばぬ先の杖
- 夏　英語であそぼう／ムササビ観察会
- 秋　湧水さんぽ／ムササビ観察会 サバイバル・サイエンス・キャンプ
- 冬　ムササビ観察会／親子かけっこ教室／星空観察会 講演『巨大な富士山を動かす方法～一般社団法人カノエサルのやり方～』

子ども公開講座

都留市教育委員会の「放課後子ども教室」事業と本学の「市民公開講座」を連携し、平成 25 年度から実施しています。小学生が対象で、夏休みや冬休みに開催しています。

R7 年度の活動

- 春　オリンピアンと走ろう！佐野夢加のかけっこ教室
- 夏　音のふしぎ ～ソーゴバイブとカスタネットに挑戦しよう～ ゴムと空気のふしぎ ～バルーンヘリコプターとバタバタ飛行機に挑戦しよう～
- 秋　Canva でつくるワークショップ ポルトガル語でこんにちは！ ～ことばで世界をつなごう～
- 冬　VR 体験・レーザーカッターでデジタル工作

ボランティア事業部

都留市社会福祉協議会と協働で、ボランティアを必要とする人と学生とを結びつける事業を行っています。今年の 4 月 9 日に「文大ボランティアひろば（ボランティア説明会）」を開催し、80 名の学生が参加しました。当日は、地域交流研究センターによるボランティア事業や募集情報等の説明に加え、都留市社会福祉協議会によるボランティア保険や市内ボランティア団体の紹介を行いました。説明会終了後には、学生からの質問や相談に応じる「ボランティア相談会」も実施しました。

学級づくりの向上をめざす実践講座

学習環境の整備や良好な人間関係の形成、主催者教育の基盤となる「学級づくり」をテーマにした実践講座を開催しています。学級づくりの実践に豊富な経験をもつ講師を招いて、現職教員や本学で教員をめざす学生を対象に、実践的な学びの機会を提供しています。

文大名画座

本学で名作映画を上映しています。どなたでも無料で見ることができ、映画の背景にある社会問題や意義などを本学教員が解説します。

出前講座

本学の教員がまちのみなさんのもとへ伺って講義を行います。生涯学習へのニーズにお応えするとともに、大学の教育・研究内容に興味を持っていただくことを目的としています。

『こどもフィールド・ノート』

地域の豊かな自然や文化、歴史を教育資源とした、子どもの体験的・探求的な学習を支える生活科・総合的な学習の時間のカリキュラム開発を目的とした冊子で、小学校の教員と地域交流研究センターの教員が協力し、年１回発行しています。